

経塚森遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第219集



2015

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



き ょ う づ か も り

経塚森遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 219 集

平成 27 年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター





1区全景(南から)



2区全景(北から)

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が発掘調査を実施した、経塚森遺跡の調査成果をまとめたものです。

経塚森遺跡は、山形県内陸部の中央に広がる山形盆地北端に位置する村山市にあります。本遺跡は、最上川右岸の山麓斜面に広がる標高 105m の微高地に位置しており、遺跡範囲は東西 100m、南北 170m と考えられています。周辺には畠地や果樹園が広がっています。また、本遺跡周辺には、北隣の清水遺跡をはじめ、田向遺跡、田向 2 遺跡などが位置しています。市内には数多くの遺跡が分布し、現在までに 150 以上の遺跡が登録されています。時代は旧石器時代から中・近世と多岐にわたって確認されています。

この度、東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、本遺跡の発掘調査を実施しました。検出した遺構は、2 間 × 2 間と小規模ながら掘立柱建物跡が 2 棟検出され、溝跡、土坑、柱穴・ピットなどの遺構を検出しました。出土遺物は、主に土師器、須恵器が多く出土しており、少量ですが縄文土器、磁器が出土しています。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 菅野 澤

凡　　例

- 1 本書は、東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設に係る「経塚森遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財团法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年4月1日に財團法人から移行）が実施した。
- 4 本書の執筆は、安部将平、五十嵐萌が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、伊藤邦弘、齊藤敏行、須賀井新人が監修した。本書の執筆分担は、以下のとおりである。
 - 第Ⅰ章 安部将平
 - 第Ⅱ章 第1節 安部将平、五十嵐萌
 - 第2節 安部将平
 - 第Ⅲ章 安部将平、五十嵐萌
 - 第Ⅳ章 安部将平
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SB…掘立柱建物跡	EP…建物跡柱穴	SD…溝跡	SK…土坑	SP…柱穴・ビット
SX…性格不明遺構	RP…登録土器	P…土器片		
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 8 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。
- 9 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。
- 10 遺物観察表において括弧内の数値は、図上復元による推定値を示している。

調査要項

遺跡名	経塚森遺跡						
遺跡番号	208-121						
所在地	山形県村山市大字名取字経塚森						
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所						
調査受託者	財團法人山形県埋蔵文化財センター（平成 22 年度） 公益財團法人山形県埋蔵文化財センター（平成 25・26 年度）						
受託期間	平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日 平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日 平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日						
現地調査	平成 22 年 5 月 17 日～8 月 27 日、10 月 19 日～11 月 30 日						
調査担当者	平成 22 年度	調査課長	阿部明彦	調査課補佐	伊藤邦弘	調査研究員	三浦勝美（調査主任）
				調査研究員	大場正善		
	平成 25 年度	整理課長	黒坂雅人	調査員	五十嵐萌（整理主任）		
				調査員	伊藤邦弘		
	平成 26 年度	整理課長	安部将平（整理主任）	調査員			
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課（平成 22 年度） 山形県教育庁文化財・生涯学習課（平成 25・26 年度）						
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所 村山市教育委員会 山形県教育庁村山教育事務所 村山東根土地改良区						
業務委託	地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務 国際航業株式会社 基準点測量業務 株式会社三和技建						
発掘作業員	伊藤悟 太田邦子 小川勝男 奥山利男 楠川敏雄 後藤光夫 小松薰 佐藤章 菅原一雄 高橋ちう子 武田静子 丹野幸一 長岡忠 松本栄 三澤國昭 村岡元三 (五十音順)						
整理作業員	小林美喜 持留陽子 (五十音順)						

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過と方法	1
3 グリッド設定	2
4 整理作業の経過	2
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 調査の成果	
1 基本層序	10
2 遺構の概要	10
3 出土遺物	12
IV 総括	25
報告書抄録	卷末

表

表 1 調査区工程表	2	表 4 鍋文土器觀察表	24
表 2 遺跡地名表	7	表 5 土師器・須恵器觀察表	24
表 3 SB20・30 摳立柱建物跡觀察表	19	表 6 磁器觀察表	24

図 版

第 1 図 調査区概要図	3	第 8 図 SB20 摳立柱建物跡	17
第 2 図 地形分類図	5	第 9 図 SB30 摳立柱建物跡	18
第 3 図 遺跡位置図	6	第 10 図 SD4・5溝跡、SK19土坑	20
第 4 図 調査区全体図	13	第 11 図 SP6・7・8・9・29柱穴、SX40性格不明遺構	21
第 5 図 遺構配置図(1)	14	第 12 図 遺物実測図(1)	22
第 6 図 遺構配置図(2)	15	第 13 図 遺物実測図(2)	23
第 7 図 基本層序図	16		

写真図版

巻頭写真 1	1 区全景	写真図版 8	SB20・30 完掘状況、SD4 溝跡断面・完掘状況
巻頭写真 2	2 区全景	写真図版 9	SK19 土坑断面・完掘状況、RP9 出土状況、
写真図版 1	調査前近景、9 トレンチ全景	SX40	性格不明遺構断面、SP6・7 柱穴・ビット断面・
写真図版 2	1・9 トレンチ基本順序、1 区基本順序		完掘状況
	1 区遺構検出状況	写真図版 10	SP8・9 断面・完掘状況、SP29RP7・8 出土状況
写真図版 3	SB20 摶立柱建物跡検出・完掘状況	写真図版 11	出土遺物（1）
写真図版 4	SB20EP21～24・26・28 柱穴断面・完掘状況	写真図版 12	出土遺物（2）
写真図版 5	SB30 摶立柱建物跡検出・完掘状況	写真図版 13	出土遺物（3）
写真図版 6	SB30EP32～35・37・42 断面・完掘状況		
写真図版 7	SB30EP38・39 断面・完掘状況		
	SB20・30 完掘状況		

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

経塚森遺跡の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による東北中央自動車道（東根～尾花沢間）の建設事業に伴う緊急発掘調査である。

平成 8 年に建設省東北地方建設局山形工事事務所（当時）により東北中央自動車道相馬尾花沢線（東根～尾花沢間）が計画された。建設事業の内容は、東北内陸部の産業、経済、文化の広域的な交流・連携の促進はもとより、緊急時における代替および迂回等のネットワーク機能の強化を目的としている（国土交通省 2011）。これを受け、山形県教育委員会は、平成 11 年 4 月に事業範囲内の現地確認調査及び表面踏査を行い、土師器・須恵器片などの遺物を採取し、同年に本遺跡を新規登録した。その後、この事業計画は、平成 14 年に開通した東北中央自動車道（上山～東根間）と尾花沢新庄道路を接続するため、東根市羽生～尾花沢市尾花沢に至る延長 23km の高速道路建設事業となつた。これを受け、平成 21 年 8 月 10 日に県教育委員会文化財保護推進課（現文化財・生涯学習課）により事業予定地についての詳細分布調査（試掘調査）が実施された。1.5m × 4 ~ 15m のトレンチ計 5 本（総面積 73.5 m²）を設置し、調査した結果トレンチ 2 から溝跡を検出した。その他の遺構・遺物は出土しなかつたが、周辺遺跡との位置関係から遺跡主体は試掘場より北西斜面にあるものと遺跡範囲であると判断された（山形県教育委員会 2011）。

平成 21 年 8 月 28 日に山形県教育委員会が事業主体者である国土交通省山形河川国道事務所に対し、本遺跡の詳細分布調査報告が行われた。その後、県教育委員会と国土交通省で協議を行い、同事業関連で削平される範囲について記録保存のための緊急発掘調査を実施する運びとなり、財團法人山形県埋蔵文化財センター（当時）が国土交通省山形河川国道事務所から委託を受けて、平成 22 年度に発掘調査を実施する事となった。なお、同じ東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設事業に伴う発掘調査は現在（平成 26 年度）までに本遺跡を含め

19 遺跡を数える。

2 調査の経過と方法

調査は、平成 22 年 5 月 17 日～8 月 27 日、10 月 19 日～11 月 30 日までの延べ 59 日間で実施した。

5 月 17 日に調査事務所に器材搬入を行い、調査を開始した。調査前全景写真を撮影後、調査区内にトレンチを 12 本設定し、5 月 18 日～31 日まで重機によるトレンチ掘り・表土除去を行い、表土除去終了区域から順次トレンチ内面整理を実施した。トレンチ調査後、6 月 16 日に拡張区確定のため事業主体者である国土交通省山形河川国道事務所の担当者及び山形県教育委員会を交え現地にて調査範囲の協議を行った。その結果、調査区北側の 1 区（940 m²）を全面的に拡張して発掘調査を行なう運びになり、後日未買収地を含めた調査区南側部分の買収完了を待ってから調査区南側の 2 区（2,180 m²）の調査に着手することとなった。

6 月 21 日から調査区北側である 1 区をトレンチから面的に広げるために重機による表土除去、面整理及び遺構検出を実施し、またそれと並行して外部委託業務による基準点測量（グリッド杭打設）を行った。

7 月 1 日から基本順序の断面図作成及び写真撮影を行ながる、並行して遺構精査を行った。遺構精査の進捗状況を確認しながら、順次造り方・平板測量及びトータルステーションによる平面図作成を行った。その間、個別遺構の平面図作成、断面・完掘写真撮影などの記録作業を適宜行っていった。

8 月 24 日に外部委託による 1 区の空中写真撮影測量を実施し、8 月 27 日をもって 1 区の調査を終了した。

10 月 19 日から未買収地であった地区が買収完了となったため、調査区 2 区として調査を開始した。1 区の調査同様、重機による表土除去、遺構検出、遺構精査、記録作業の順で調査を進めた。第Ⅲ章にて後述するが、この 2 区では、調査区中央部に 2 棟 × 2 棟の掘立柱建物跡を 2 棟検出した。また、10 月 24 日には、現地で本遺跡と近隣に位置する清水遺跡（1 地区第 1 次）との

1 調査の経緯

合同の調査説明会を実施、地元住民を中心に約 80 名の参加を得た。

11月 22 日に外部委託による 2 区の空中写真撮影測量を実施した。11月 26 日に撤収に向けての環境整備と器材の片づけを行い、11月 30 に器材撤収を行い調査を終了した。

3 グリッド設定

調査区を区画するグリッドは、平面直角座標系第 X 系: $X = -26,000,000$, $Y = -12,000,000$ を原点とし 4m 四方で設定した（第 1 図）。グリッドの設定基準は、まず山形県全域を囲むように南北を X 軸、東西を Y 軸とし、X 軸を A ~ E, Y 軸を A ~ C とし県全域を画した。このアルファベット表記を 40 km 単位で大グリッド、その中に 400m に区分する中グリッド、さらにその中に 4m 単位で区分する小グリッドを設定した。中・小グリッドは、共に数字表記で南から北へ 00 ~ 99、西から東へ 00 ~ 99 で表記し、「AA0000 ~ 0000」と位置を表記した。グリッドの帰属は、南西隅を基準としている。この表記方法は、当事業にかかる他の村山地区の遺跡でも

共通している。

4 整理作業の経過

発掘調査終了後、平成 22 年 12 月 1 日から整理作業を開始し、平成 23 年 3 月 31 日まで行なった。出土遺物は、12 月 20 日まで洗浄を行い、12 月 27 日まで注記作業などの基礎整理作業を行なった。それと並行して調査時に作図した遺構平面図の調整、個別遺構図のデジタルトレース、業務委託した空撮図面の校正なども進めた。また、現場で記録した写真、台帳などの記録類整理を行ない、平成 22 年度の整理作業を終了した。

平成 25・26 年度の作業は、出土遺物の接合・復元、掲載遺物の実測図作成、拓本、実測図のデジタルトレース、遺構図版作成、版組み、遺物写真撮影、原稿執筆など報告書作成・編集作業を行った。報告書作成後の出土遺物については、報告書に掲載したものと未掲載のものを別にして梱包・収納した。なお、本報告書掲載遺物については、追加で図番号を注記している。本遺跡の調査成果をまとめ、平成 27 年 3 月末日に本報告書を刊行した。

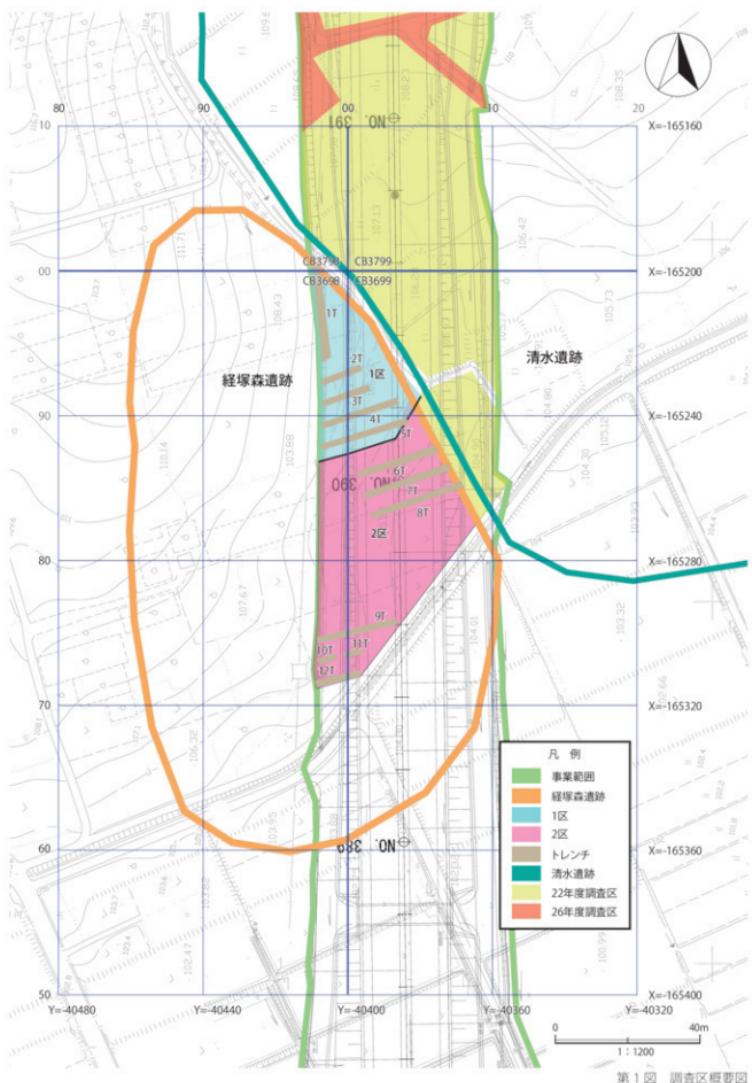
表 1 調査工程表

平成 22 年度	5 月		6 月					7 月					8 月				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15		
作業内容／週	■																
環境整備	■																
トレンチ調査							■										
表土除去	■	■					■	■									
グリッド設定																	
面整理・遺構検出							■	■	■								
遺構精査								■	■	■	■	■	■	■	■	■	
記録（作図・写真）	■	■	■					■	■	■			■	■	■		
空中写真撮影																■	
発掘調査説明会																	

平成 22 年度	10 月		11 月				
	16	17	18	19	20	21	22
作業内容／週	■	■	■	■	■	■	■
環境整備							
表土除去	■	■					
グリッド設定			■	■			
面整理・遺構検出			■	■	■	■	■
遺構精査			■	■	■	■	■
記録（作図・写真）			■	■	■	■	■
空中写真撮影	■						
発掘調査説明会							

引用・参考文献

- 国土交通省東北地方整備局 2011 「道路事業再評価 東北中央自動車道東根～尾花沢」 平成 23 年度事業評価監視委員会（第 2 回）資料
山形県教育委員会 2001 「分布調査報告書（27） 山形県埋蔵文化財調査報告書第 201 集」
山形県教育委員会 2011 「分布調査報告書（37） 山形県内重要遺跡確認調査報告書（3） 最上川関連遺跡確認調査報告書（4） 弁出遺跡確認調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 214 集
財團法人山形県埋蔵文化財センター 2011 「年報 平成 22 年度」



II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

経塚森遺跡は、山形県村山市大字名取字経塚森（北緯38度30分37秒、東經140度22分11秒）に位置する。

本遺跡が位置する村山市は、県内陸部のほぼ中央に位置し、東に奥羽山脈に属する標高1,015.6mの巣岳、西には出羽山地に属する標高1,462mの葉山が画している。市内には、一級河川である最上川が北流しており、市内中央西側で大きく穿入曲流している。その難所として知られる最上川三難所（轟点・三ヶ瀬・隼）も村山市に位置する。最上川の水は村山市の田畠や果物の栽培に適した肥沃な土壌をもたらしている。

本遺跡は、最上川右岸の山麓斜面に広がる標高105mの微高地に位置している。本遺跡が位置する範囲には畠地・果樹園が広がる耕作土壌が分布する。遺跡の北西側には、地形を利用して造られたさくらんぼカントリークラブゴルフ場が位置している。また、この地域は尾花沢盆地、山形盆地という2つの盆地の境界部にあり、一部、山形盆地北端の低地が含まれる。本遺跡の地形区分は、丘陵地II（河島山丘陵）である（第2図）。その南側には、山形盆地北端部に位置する名取低地、北東部に袖崎低地、西部には白鳥・富並段丘が広がりその間を最上川が蛇行しながら北流する。

気候は、東西に1000m級の山地に囲まれた盆地型のため、フェーン現象が起きやすくて平野部では高温になりやすい傾向にある。冬は対反し大陸からの寒気が北西からの季節風にのって日本海にやってきて山の風上側で雪を降らせる。そのため、特に山々に囲まれた村山市北部は、東北地方有数の豪雪地帯である。

表層地質は、火山性岩石に属する緑色凝灰岩及び凝灰角礫岩である。本層は青緑色凝灰岩、同色凝灰質角礫を主体とする層である。土壤は、表層腐植質黒土ク土壤であり、土壤統は大川口統である。大川口統は、非固結火成岩を母材としている。堆積様式は、風積で主に段丘などに分布し、畠地として利用されている（山形県企画調整部土地対策課 1979）。

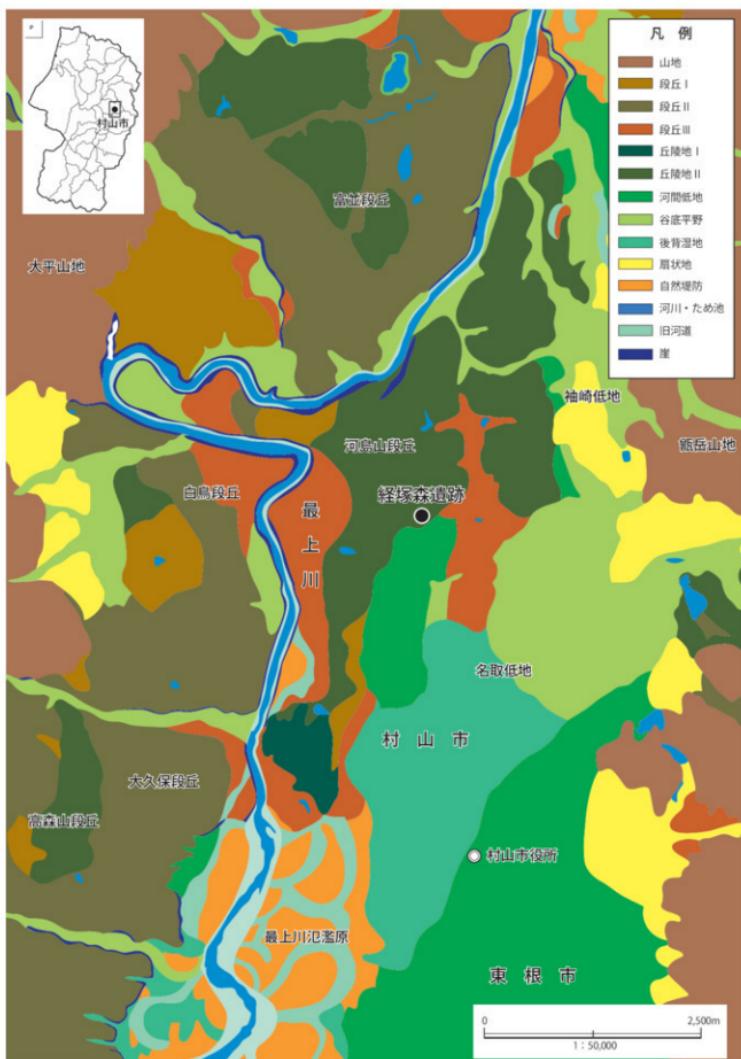
2 歴史的環境

村山市では、数多くの遺跡の分布・発掘調査が実施されている。今までに150箇所以上の遺跡が登録されている。

経塚森遺跡は、最上川右岸の河島山丘陵南麓に広がる微高地に位置する平安時代の集落跡である。周囲には、多岐にわたる遺跡が分布し調査されている。第3図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「富並」、「延沼」、「谷地」、「福岡」を編集し、本遺跡を中心とした図幅内に周知されている48遺跡を掲載した。

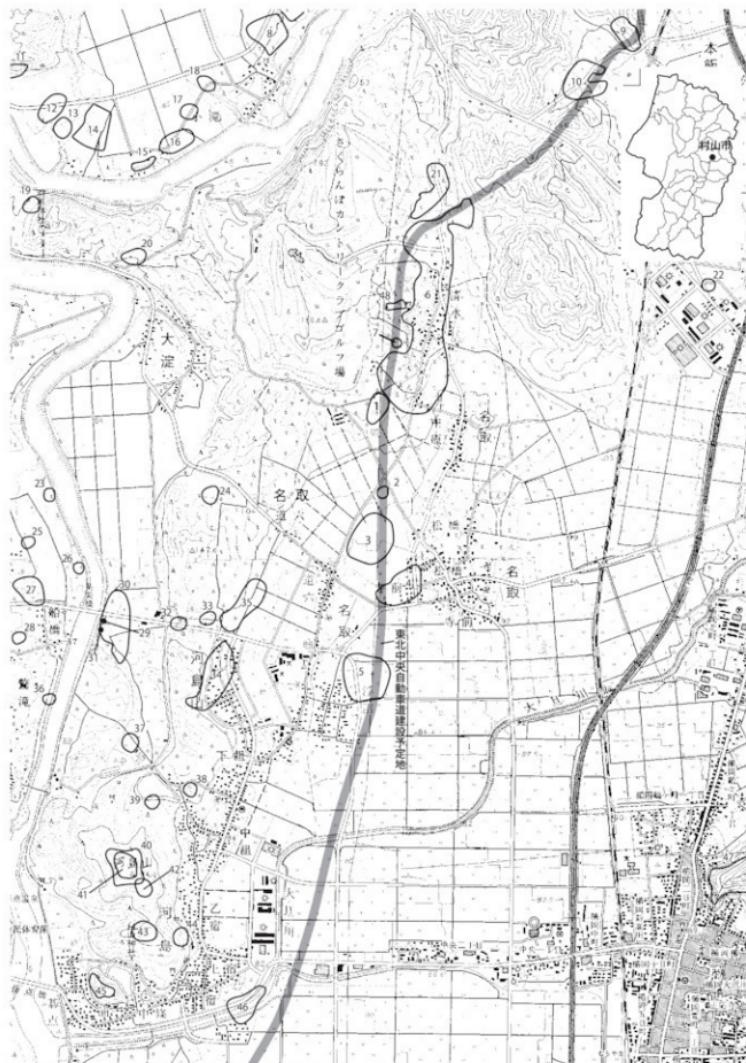
旧石器時代の遺跡は、本遺跡から北に約1km離れた清水西遺跡（7）と河島山遺跡（43）などが挙げられる。清水西遺跡は、平成24年度に当センターによる発掘調査が行われ、台形石器及び平坦打面で剥離された厚手石刃を素材にしたナイフ形石器群などが出土している（山形県埋文 2013）。河島山遺跡は、最上川右岸に張り出した出羽丘陵の突端、河島山から南斜面に位置している。杉久保型ナイフ、石刃、彫刻刀、搔器などの石器群が出土している。また河島山は遺跡立地に恵まれていたと考えられており、旧石器をはじめ、縄文時代（早期～中期）、弥生時代、古墳時代及び中世などに属する各期の遺構・遺物が確認される複合遺跡である。また、昭和26年4月1日に城館跡、1号墳、板碑群が県指定史跡に指定された（村山市史編さん委員会編 1981）。

縄文時代の遺跡は、早期から晩期に至るまで各時期の遺跡が確認されている。川口遺跡（14）では、竪穴住居跡13棟、墓壙45基（石組による石棺墓を含む）、集石遺構、立石遺構などが検出されている。（6基確認されている）石棺墓は、その主軸方向に共通性があり、石組を有するタイプの墓壙として全体的にまとまりがあると指摘されている。立石遺構は、立石（石棒）はほぼ垂直状態で出土し、極めて稀少な事例である。出土遺物は、土器をはじめ多種多様なものが出土している。土器は堀之内2式・加曾利B1式に相当するものや東北地方北部の十腰内1式系も出土している。石器は、日常の生業で



第2図 地形分類図

II 遺跡の位置と環境



* 国土地理院発行 2万5千分の1 地形図「富並」「延沢」「稻岡」「谷地」に加筆

第3図 遺跡位置図

表2 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	経塚森	散布地	平安	25	袋	集落跡	縄文・奈良
2	田向2	集落跡	平安	26	川口A(大竹)	集落跡	縄文・奈良
3	田向	散布地	縄文	27	船橋	集落跡	縄文
4	松橋	散布地	平安・中世	28	鹿の子沢C	集落跡	縄文
5	岬田	散布地	平安	29	後原(墳墓)	墳墓	中世
6	清水	散布地	縄文・平安	30	後原	集落跡	縄文・奈良
7	清水西	集落跡	旧石器・縄文	31	後原(板碑)	集落跡	平安
8	小瀬A	集落跡	縄文	32	西原A	散布地	縄文
9	大原1	集落跡	縄文	33	西原B	集落跡	平安
10	東熊野苗畠	集落跡	縄文	34	西原C	集落跡	縄文・奈良・平安
11	里向山B	集落跡	縄文	35	草伊賀B	集落跡	平安
12	里向山C	散布地	縄文	36	川口1B(大竹)	集落跡	縄文
13	里向山D	散布地	縄文	37	後久保	集落跡	縄文・平安
14	川口	集落跡	縄文	38	河島山口A	集落跡	縄文
15	早房A	集落跡	縄文	39	河島山口B	集落跡	縄文
16	早房B	集落跡	縄文	40	河島山	城郭跡	中世
17	早房C	集落跡	縄文	41	河島山古墳群	墳墓	古墳
18	早房D	集落跡	縄文・弥生	42	河島山	城郭跡	中世
19	小坂	集落跡	縄文	43	河島山	集落跡	先史
20	浦	散布地	縄文	44	堀川前山	集落跡	弥生
21	清水北	散布地	縄文・平安	45	河島・丸森	集落跡	縄文
22	第二農場	集落跡	縄文	46	八反稲千原	散布地	縄文・平安
23	棚子	集落跡	縄文・平安	47	根岡城	城郭跡	中世
24	草伊賀	集落跡	縄文	48	羽黒神社西	集落跡	縄文

使用されるもの他、石棒・石刀などが出土している。また、「パン状炭化物」・「アスファルト塊」が出土している（山形県教委1990）。早房D遺跡（18）は、富並段丘の南端、最上川にむかって舌状に張り出した段丘上に位置する。遺物は、大洞B式の半精製深鉢が出土し、後期から晩期の遺跡と捉えられている（山形県教委1988）。羽黒神社西遺跡（48）は、平成26年度に当センターによる発掘調査が行われ、盛土遺構、フラスコ状土坑、石壙いが、土器敷き石壙いがなどを検出した。遺物は縄文中期中頃（大木B式）の遺物（土器・土製品・石器・石製品など）が出土し、さらに少量ながらも縄文早期（押型文・条痕文・尖底土器）の土器片が出土している（山形県理文2014b）。

弥生時代の遺跡は、確認数は少ない。塩川前山遺跡（44）は、河島山の南東斜面に位置し、後期の天王山式に並行する土器とアメリカ式石鏡が出土している。遺跡の位置図範囲外になるが、福道遺跡は、最上川左岸、本道跡から南西に約2.6kmの地点で北側に最上川支流の柳石川が流れる河岸段丘状に位置する。遺構は被熱した集石遺構のみである。土器は包含層より中期～後期に属するものが出土しており、中でも中期中葉の高环などが注目される（小瀬1995）。

古墳時代の遺跡は、河島山古墳群（41）、名取古墳が挙げられる。河島山古墳群は、河島山1号墳・2号墳からなる。1号墳は、河島山頂付近の東斜面に位置する。円墳で墳丘頂部は径約8m、墳丘の底径は約24m、高さ約4m、墳丘周辺には幅約4mの周溝を有している。凝灰岩製の箱型石棺で、副葬品は確認されておらず、埴輪・葺石も確認されていない。2号墳は、同山の南西にある丸森山山頂付近に位置する。1号墳同様、円墳で周囲には周溝を有する。両古墳とも本格的な発掘調査は行われていない。名取古墳は、河島山から北に約3km、河島山に連なる丘陵の西側で最上川の自然堤防上に位置する。河島山1・2号墳と同様、円墳で墳丘頂部は径約10m、墳丘の底径は約36m、高さ約2.4m、墳丘全周に周溝をめぐらす。日本海側で最北に位置する古墳として注目される（伊豆田1990）。また、当センターで平成22年度に発掘調査を実施した東熊野苗畠遺跡（10）の河川跡から古墳時代前期と考えられる土器師甕片が出土している（山形県理文2011）。

奈良・平安時代の遺跡は、当センターが行った平成22～25年度の発掘調査によって、村山市の古代の様相がより明らかになりつつある。本遺跡（1）、田向2遺跡（2）、田向遺跡（3）、松橋遺跡（4）、蟇田遺跡

(5) 清水遺跡 (6)、西原C遺跡 (34) などが挙げられる。田向2遺跡では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑などが検出され、中でも一部の溝跡・土坑から10世紀中葉から後葉に比定される土師器環・皿が出土している。松橋遺跡では、掘立柱建物跡・井戸跡などが検出され、遺物は土師器・須恵器・磁器で、9世紀後半から10世紀前半頃を主体とする集落跡である（山形県埋文2011）。岬田遺跡では、掘立柱建物跡・河川跡などが検出され、出土遺物は土師器環底部に「定」と書かれた墨書き器・木製の斎場・人形や鳥形などの祭祀儀礼に使われたと考えられる遺物などが出土している（山形県埋文2013a）。清水遺跡では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡などが検出され、一部の竪穴住居跡・溝跡などの覆土から西暦915年に噴火した十和田火山のものと考えられる灰白色火山灰が確認されている。9世紀代と考えられる区画溝に囲まれた掘立柱建物群が確認され、大きいものは3間×3間で、倉庫群の可能性が高いと考えられている。また、これらの建物間で時期差は確認されないことから短期間に建て替えが行われたと考えられている。出土遺物は土師器・須恵器のほか、土師器底部に「縄」「削」「太」「寺」と書かれた墨書き器・鉄製紡錘車・鉄滓・輪の羽口などが出土している（山形県埋文2011・2012・2013a）。西原C遺跡は、平成7年に村山市教育委員会による発掘調査が行われ、掘立柱建物跡・竪穴住居跡などが検出され、中でも掘立柱建物跡は広範囲にわたり20棟以上検出されている。出土遺物は、土師器・須恵器のほか、須恵器底部に「石」と書かれた墨書き器・土製紡錘車や砥石などの石製品が出土している（村山市教委1996）。

中世は、河島山遺跡（40・42）、楯岡城（47）などが挙げられる。河島山遺跡は、山頂と東側の山腹と2箇所に分かれ、山頂はチャシ址一の丸と呼ばれる鉢巻式遺跡で、空堀と土壁に囲まれた円形の曲輪である。チャシ址二の丸は二重の空堀で曲輪は削平されず、自然地形のままである（山形県教委1996）。両者の築城年代は異なる解釈が出されているが、詳細は不明である。また、河島山からは多数の板碑・五輪塔などが完形・破片を合わせ70基以上確認されている。同山を開墾した際に出土したとされているが、現在は山頂の一帯にまとめられている。板碑の石材は、凝灰岩で様式はいずれも生型

を呈し、大きいもので、約90cmを測る。明確な時期は不明であるが様式から室町時代末頃から桃山時代初めと考えられている。楯岡城は、村山市街地の北東に隣接する楯山に築かれた連郭式の山城で別名舞鶴城とも呼ばれている。南側の山裾に館があり、館を中心に城下町が開けていた。楯山は、瘋岳の西側に伸びる台地で、その先端の西楯山・中楯山から構成される。西楯山は、標高約209mで山腹は急斜面である。三方に伸びた尾根に大小の曲輪を段々と連続的に配置する。頂上の曲輪も平坦で、櫓などの建造物が築かれていたと考えられている。頂上からは近隣の市町村が一望できる。中楯山の頂上曲輪も平坦で南東部に建物跡が確認されているが、詳細は不明である。曲輪の東西は堀切で区切られており、楯岡城の沿革について『最上楯岡元祖記』には、承元2年（1208）に楯山月楯に開城したが4代にして没落、弘長元年（1261）に奥州より里見氏が入部して楯岡に開城。本城と名付けたとあり、5代144年間続いたとされる（山形県教委1996）。室町時代に入り、山形城主斯波兼顕の孫、最上満直の四男最上伊予守満国が応永13年（1406）に入部、楯岡氏を名乗って満國以後7代約190年間続く。楯岡城は最上氏にとって北進における重要な拠点であったとされる。

7代満茂・8代光直が活躍した近世期に楯山が城下と共に整備された。満茂は、秋田県南部攻略の中心となつて活躍し、後に秋田湯沢城に移った。以後、楯岡城は最上家臣が交代で勤番するが、元和2年（1616）、最上義光の実弟で最後の城主である楯岡光直が封じられた後は、最上氏家中でも重要な地位を築く。光直は1万7千石を預け、領地は楯岡・湯野沢（現湯沢）・楯山及び大石田・井出・深堀（現大石田町）の各村で、最上川を抑える要地であった（小畠1995）。元和8年（1622）に最上氏が改易になったことにより、楯岡城は廢城となった。また同年の名取村（現在の村山市名取・一部の楯岡地区）は、最上氏領から山形藩領になる。名取村は浮沼・中原・清水・境ノ目の枝郷がある。寛永20年（1643）からは幕府領、安政2年（1855）以降は松前藩領となり変わり、明治期を迎える。

明治維新後の村山市は、行政区画の変遷に伴い旧幕府領は明治2年（1869）に酒田県、また翌年には山形県に編入された。近現代における名取村は、明治11年

(1878)には北村山郡に属し、明治22年(1889)には名取・大淀・長島・河島が合併し、西郷村の大字となり、昭和29年から村山市の大字名となった(佐藤2011)。

本遺跡の周辺には、先述した田向2遺跡、清水遺跡、松橋遺跡、岬田遺跡などが位置している。

引用・参考文献

- 伊豆田忠悦 1990 「村山市」『山形県の地名 日本書紀地名大系6』 p.475～p.485 平凡社
 小畠広明 1993 「村山市」角川 日本地名大辞典 6 山形県 p.963～p.969 角川書店
 佐藤敏敏 2011 「村山市再発見～その姿と心～」
 村山市教育委員会 1996 「西原C遺跡発掘調査報告書」 村山市埋蔵文化財調査報告書第4集
 村山市史編さん委員会編 1981 「村山市史 別巻一 原始・古代」 村山市
 村山市史編さん委員会編 1994 「村山市史 近世編」 村山市
 山形県企画調整部土地対策課 1979 「土地分類基本調査 尾花沢 5万平方の1 土国調査」
 山形県企画調整部土地対策課 1981 「土地分類基本調査 桥岡 5万平方の1 土国調査」
 山形県教育委員会 1983 「農林事業関係遺跡(1)－発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第63集
 山形県教育委員会 1988 「早房D遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第131集
 山形県教育委員会 1990 「川口遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第151集
 山形県教育委員会 1996 「山形県中城城遺跡調査報告書」 第2集(村山地城)
 山形県教育委員会 2001 「分布調査報告書(27)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第201集
 山形県教育委員会 2011 「分布調査報告書(37)」 山形県内重要遺跡確認調査報告書(3) 最上川開港遺跡確認調査報告書(4) 押出道路
 確認調査報告書(37) 山形県埋蔵文化財調査報告書第214集
 山形県教育委員会 2012 「分布調査報告書(38)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第215集
 山形県教育委員会 2013 「分布調査報告書(39)」 山形県内重要遺跡確認調査報告書(5) 押出道路確認調査報告書(5) 山形県埋蔵文化財調
 查報告書第215集
 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2011 「年報 平成22年度」
 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2012 「作野遺跡第3次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書205集
 公益財团法人山形県埋蔵文化財センター 2012 「年報 平成23年度」
 公益財团法人山形県埋蔵文化財センター 2013a 「年報 平成24年度」
 公益財团法人山形県埋蔵文化財センター 2013b 「北原2遺跡第1・2次北原4遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査
 告書207集
 公益財团法人山形県埋蔵文化財センター 2014a 「森の原遺跡第3次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書211集
 公益財团法人山形県埋蔵文化財センター 2014b 「羽黒神社西遺跡発掘調査説明会資料」
 横山重男・登田慶信・伊藤浩郎・渡辺 信 1998 「山形県の歴史」 県史6 山川出版
 横山重男監修 2003 「図説 村山の歴史」 鷹士出版社
 横山重男監修 2008 「決定版 村山ふるさと大百科」 鷹士出版社

III 調査の成果

1 基本層序

トレンチ、調査区とともに層序の確認を行なった。トレンチは、1区で2か所(1トレンチ)、2区では3か所(7・9トレンチ)、調査区では3か所(1区東壁基本層序a・b・c)でそれぞれ確認した(第5~7図)。その結果、土層は大きく2層に分けることができる。

1層は、黒褐色砂質シルトを主体とした耕作土層、2層は黒褐色砂質シルトを主体とした黒ボク土層である。

1層の耕作土層は、畑や果樹栽培の際に盛土された表土層である。調査区周辺は畠地や果樹園が広がる耕作地のため、土壤整備の痕跡も多く残っている。また、耕作時の掘り返しによる擾乱も多く、この層からも遺物が出土している。土層の深さは約30~40cmほどである。

2層の黒ボク土層は、層上が遺構検出面になっている。また、下層では地山との漸移層が見られる。土層の深さは1層と同じく約30~40cm程である。

2 遺構の概要

本遺跡は、平成22年度に発掘調査を実施した。始めに遺構・遺物の有無を確認するためにトレンチ調査を行い、その後、調査区を設定し本調査を開始した。調査区の北側を1区940m²、南側を2区2,180m²とし、総面積3,120m²の範囲で調査を実施した。

遺構全体図及び配置図を第4~6図、個別遺構はそれぞれ種別ごとに第8~11図に示した。遺構の配置、断面図等についても先に挙げた図を参照されたい。また、登録遺構番号は1~42、登録遺物番号は1~8を登録した。

1~2区で検出した遺構は、掘立柱建物跡、溝跡、土坑、柱穴・ピット、性格不明遺構である。遺構の分布域は、そのほとんどが1区から2区北側で、主に調査区北側に集中している。また、今回の調査で検出した遺構からの出土遺物は少量であり、遺構の時期特定には至らず、判然としない。掲載した遺物の大半が遺構外出土である。以下に遺構別に詳細を述べる。

A 掘立柱建物跡

SB20 掘立柱建物跡(第8図、表3、写真図版3・4・7・8)

SB20は、CB3699-8402、CB3699-8502~8503の範囲で検出した。柱穴は、8基(EP21~28)で構成され、桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸方向は、N-13°-Wである。桁行3.44m、梁行は3.42mを測り、面積は11.76m²となる。柱間距離(芯々間距離)は、北面は西から1.72m、1.7m、東面は北から1.84m、1.6m、南面は東から1.68m、1.75m、西面は南から1.7m、1.88mをそれぞれ測る。柱穴(EP21~28)の平面形は、円形を呈し、長径23~29cm、短径20~26cm、深さは13~29cmを測る。断面形は、底面が丸みを持つU字型を呈する。土層は、黒褐色砂質シルトを主体とし、単層または2層である。北側の柱穴は、トレンチ調査時の掘り込みで浅くなっている。柱痕跡は、確認されなかった。出土遺物は、EP24柱穴から土師器壺(9)が出土している。遺構の時期は、土師器が出土していることから平安時代と考えられる。

SB30 掘立柱建物跡(第9図、表3、写真図版5~8)

SB30は、CB3699-8401~8402、CB3699-8501~8502の範囲で検出した。柱穴は、11基(EP31~39、41~42)で構成され、桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡である。主軸方向は、N-10°-Wである。桁行は西側で3.28m・3.56m、東側で3.38m・3.6m、梁行は3.35mを測り、面積は11.32m²・12.06m²である。柱間距離(芯々間距離)は、北面のEP41~35間は1.67m、EP35~42間は1.63m、EP31~34間は1.72、EP34~37間は1.56m、東面のEP42~38間は1.84m、EP37~38間は1.84m、EP38~39間は1.76、南面のEP39~36間は1.75m、EP36~33間は1.6m、西面のEP33~32間は1.78m、EP32~41間は1.5m、EP32~31間は1.78mを測る。柱穴(EP31~39、41~42)の平面形は、円形を主体に梢円形・隅丸方形を呈し、長径18~40cm、短径12~35cm、深さは

7～24cmを測る。断面形は、壁面が緩やかに立ち上がり逆台形を呈するもの、壁面がやや外傾するもの、壁面がほぼ垂直に立ち上がるものがあり、底面は丸みを持つU字型を呈する。土層は、上層を黒褐色砂質シルト、下層を暗褐色砂質シルトとした2～3層である。また、堆積状況から北側の柱穴（EP35・41・42）は切り合いで確認されたため、建て替えが行われた可能性が考えられる。遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、古代（平安時代）に帰属するものとみなしたい。

B 溝 跡

SD4 溝跡（第10図、写真図版8）

SD4は、CB3698-9298～9299、CB3699-9300～9301の範囲で検出した。主軸方向は、N-72.5°-Eである。長さ12.3m、幅36～70cm、深さは10～15cmを測る。断面形は、底面が西側では概ね平坦であるが、東側では弧状になり壁面はやや強く外傾する。土層は、上層は黒色砂質シルト、下層は暗褐色砂質シルトの2層である。遺物は、土師器片が出土している。遺構の時期であるが、土師器片が出土していることから平安時代とみなしたい。

SD5 溝跡（第10図）

SD5は、CB3699-9301～9402の範囲で検出した。主軸方向はN-67°-Eである。主軸方向が同方向であることからSD4と同一の溝であった可能性が考えられる。長さ2.08m、幅約30cmで、確認面からの深さは3cmを測る。断面形は、壁面が外傾し底面は平坦な逆台形状を呈する。遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、古代（平安時代）に帰属するものとみなしたい。

C 土 坑

SK19 土坑（第10図、写真図版9）

検出した土坑は1基のみである。SK19は、CB3698-8498で検出した。平面形は、長径125cm、短径118cm、深さは8cmを測る。断面形は、壁面が外傾し逆台形状を呈する。土層は、黒褐色砂質シルトを主体とした単層である。出土遺物は、土師器甕（8）、須恵器甕（17）が出土している。遺構の時期は、須恵器甕（17）が出

土していることから9世紀代と考えられる。

D 柱穴・ピット

SP6～9・29 柱穴・ピット（第11図、写真図版9・10）

SP6は、CB3698-8999で検出した。平面形は、長径34cm、短径28cm、深さは25cmを測る。断面形は、底面が丸みを持つU字型を呈する。土層は單層で黑色砂質シルトである。

SP7は、CB3698-8999で検出した。平面形は、長径39cm、短径34cm、深さは27cmを測る。断面形は、底面が丸みを持つU字型を呈する。土層は、3層で黒色・暗褐色砂質シルト、黒褐色シルトである。また、断面から柱痕跡が確認できる。

SP8は、CB3698-8999で検出した。平面形は、長径40cm、短径32cm、深さは36cmを測る。断面形は、底面が丸みを持つU字型を呈する。土層は黒色砂質シルトを主体とした2層である。

SP9は、CB3698-8998で検出した。平面形は、長径42cm、短径30cm、深さは22cmを測る。断面形は、壁面が外傾し底面は段を有する。土層は2層で、上層を黒色砂質シルト、下層を黒褐色砂質シルトである。

SP29は、CB3698-8398で検出した。平面形は、長径33cm、短径30cm、深さは5cmを測る。断面形は、壁面を緩やかに立ち上がり、底面は弧状を呈す。土層は、黒褐色砂質シルトを主体とした単層である。出土遺物は、須恵器甕（10・15）が出土している。遺構の時期は、須恵器甕（15）が出土していることから9世紀代と考えられる。

E 性格不明遺構

SX40 性格不明遺構（第11図、写真図版9）

SX40は、CB3698-8498で検出した。西側は、法面の下で調査できなかったため、平面形は不明である。検出範囲における径は95cm、深さは10～19cmを測る。断面形は、壁面を緩やかに立ち上がり、底面は平坦であるが若干の起伏がある。土層は、上層が黒褐色砂質シルト、下層が褐色砂質シルトの2層である。遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺遺構（SK19）などから古代（平安時代）に帰属するものとみなしたい。

3 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は、1 箱である（文化財認定箱数）。その大半が破片であり、そのため、時期特定には至っておらず判然としないものが多い。また先述した通り遺構からの出土遺物は少量であり、遺構外出土（表土、グリッド出土など）が大半であった。

出土遺物は主に土師器・須恵器であり、全体の半数以上を占める。また少量ながらも繩文土器、磁器も出土している。以下に種別毎に詳細を述べる。

A 繩文土器

1 は、深鉢である（第 12 図、表 4、写真図版 11）。9 トレンチから出土した。縄文は LR で、縄文の節が小さく詰まっていることから、時期は晩期と考えられる。粗製土器である。

B 土師器

本遺跡で出土量が多い種別である。器種は甕（2・3・5・6・8・10～13）、环（9）である（第 12 図、表 5、写真図版 11）。土師器甕（7）は、SX18（搅乱）から出土している。なお、SX18 の堆積状況から擾乱であると判断したため、遺構の断面図化を行っていない。位置については第 5 図に示した。

2・3・5・6・8・10～13 は、それぞれ内外面にハケメ、ケズリ、ナデを施す。

4・7・9 は、赤焼土器である。4 は、外面に格子タタキを施す。色調は橙色を帯び、内面はアテ、ナデを施す。7 は、外面がタタキ、内面がアテである。9 は、ロクロ調整を施す。

D 須恵器

器種は、甕（14・19）、环（15～18・20）、蓋（21～23）が出土している（第 12・13 図、表 5、写真図版 12・13）。

14 は、甕の底部から立ち上がり部分が残存している。焼き締めが不十分だったのか、色調はにぶい黄柾を有している。底部には網代痕が見られ、内面には指の腹で撫でた痕跡が全体に認められた。19 は、外面に平行タタキ、内面にはアテ（青海波文）を施す。

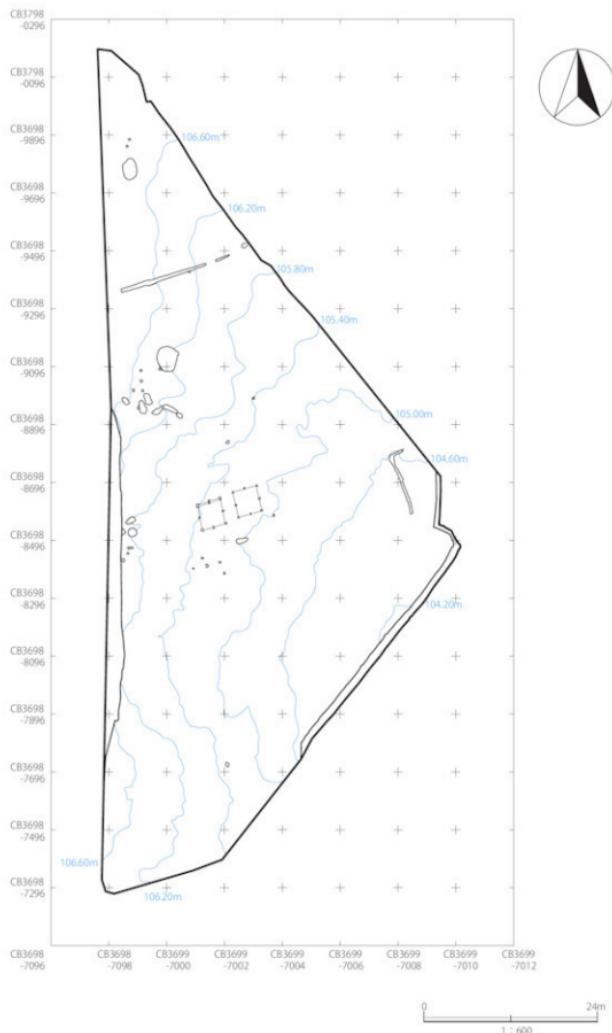
15 は、ロクロ成形で底面は回転糸切りの环である。時

期は器形から 9 世紀中頃と考えられる。16～18・20 も 15 同様、ロクロ成形であり、18・20 の底面は回転糸切りである。また、17・18 の胎土には石英が確認できる。時期であるが、17 は器形から 9 世紀前半頃と考えられ、16・18・20 は、9 世紀中頃と考えられる。

21～23 は、内外面共にロクロによる成形である。21・23 は外面に一部自然釉が付着する。

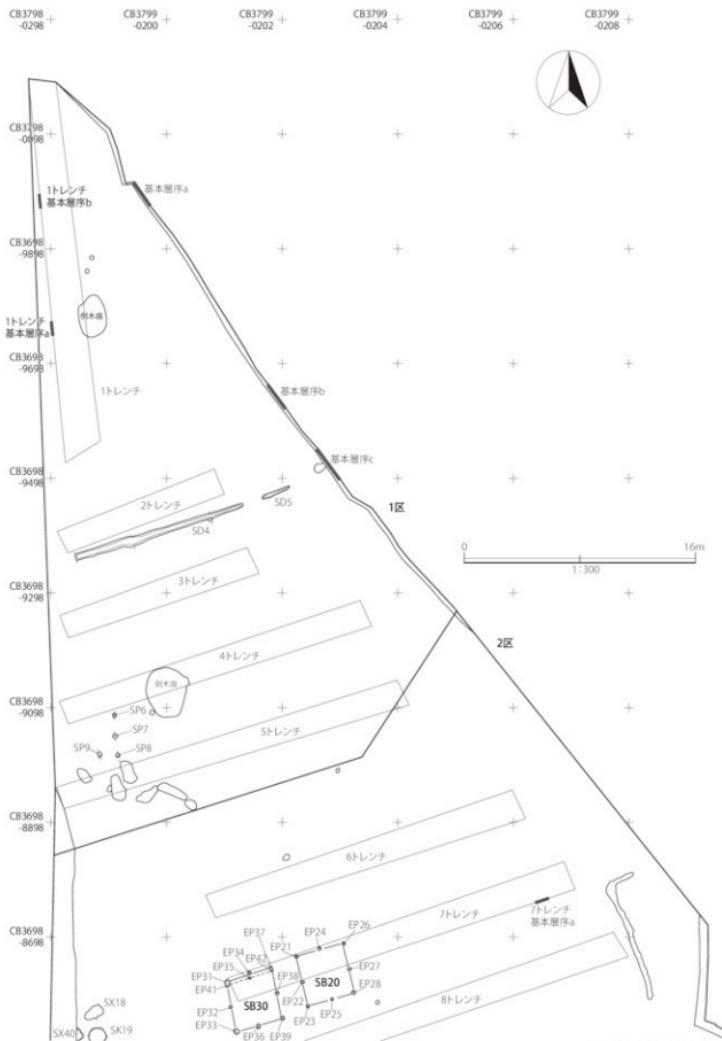
D 磁器

24 は、肥前系磁器碗である（第 13 図、表 6、写真図版 13）。ロクロ成形で底部外面に圓線を施し、また透明釉を施す。時期は 18 世紀と考えられる。



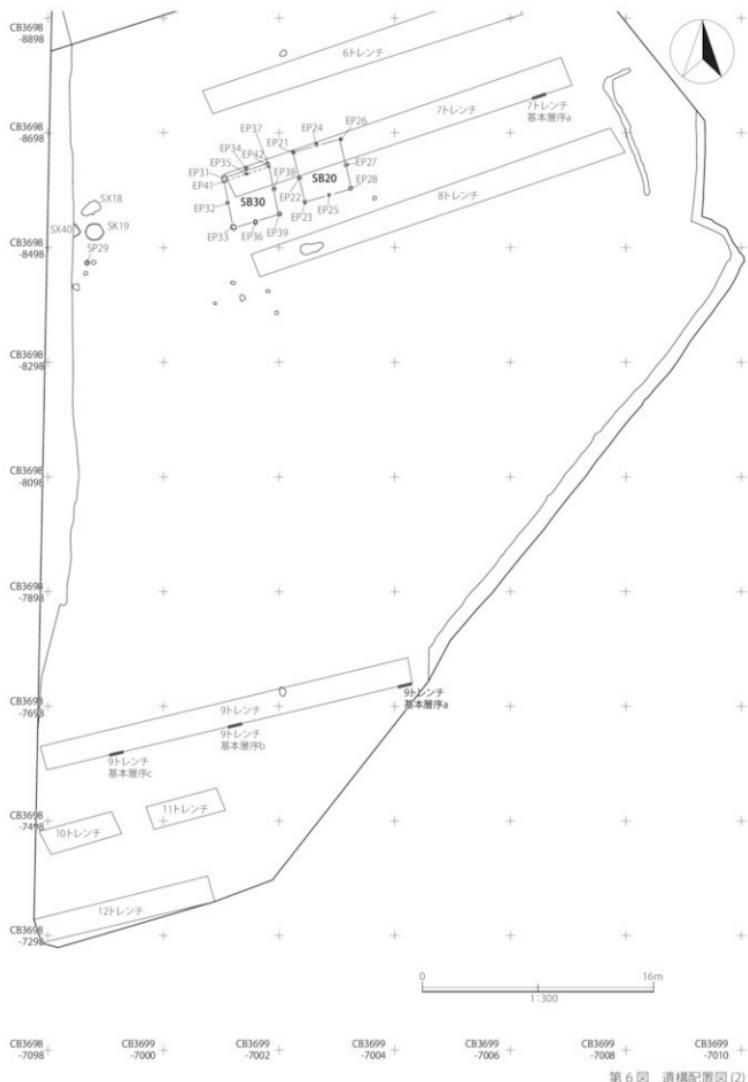
第4図 調査区全体図

III 調査の成果



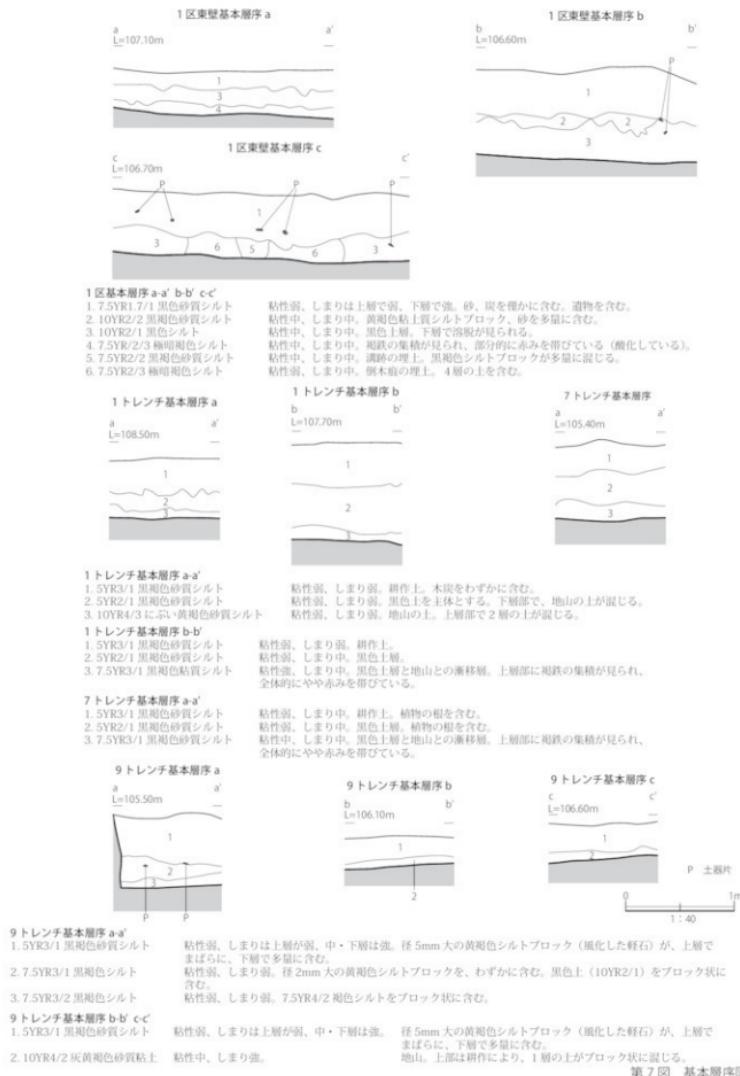
第5図 遺構配置図(1)

III 調査の成果

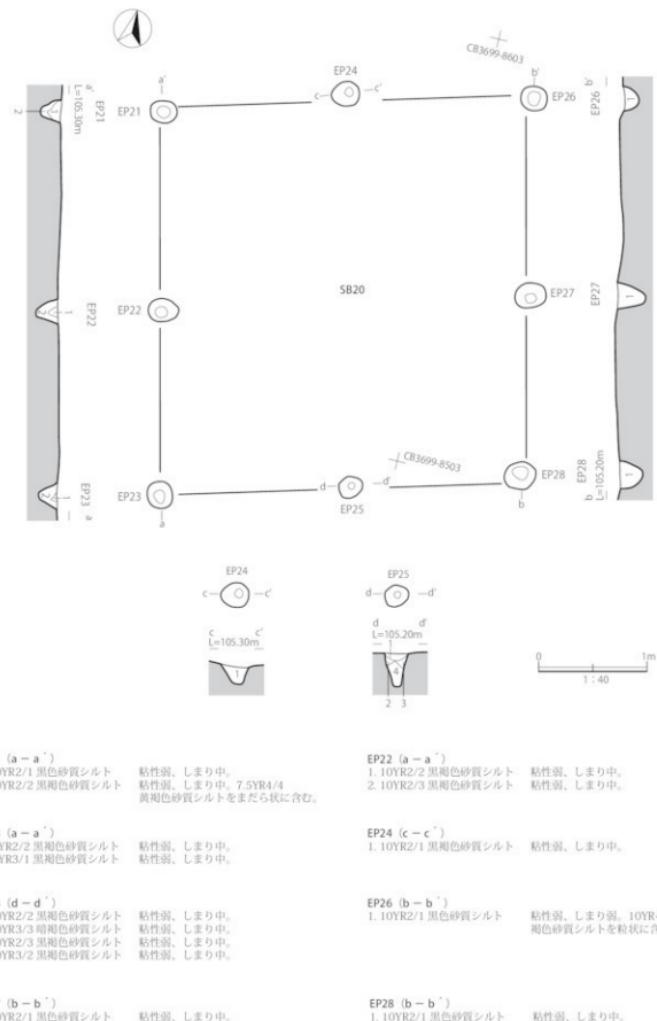


第6図 遺構配置図(2)

III 調査の結果

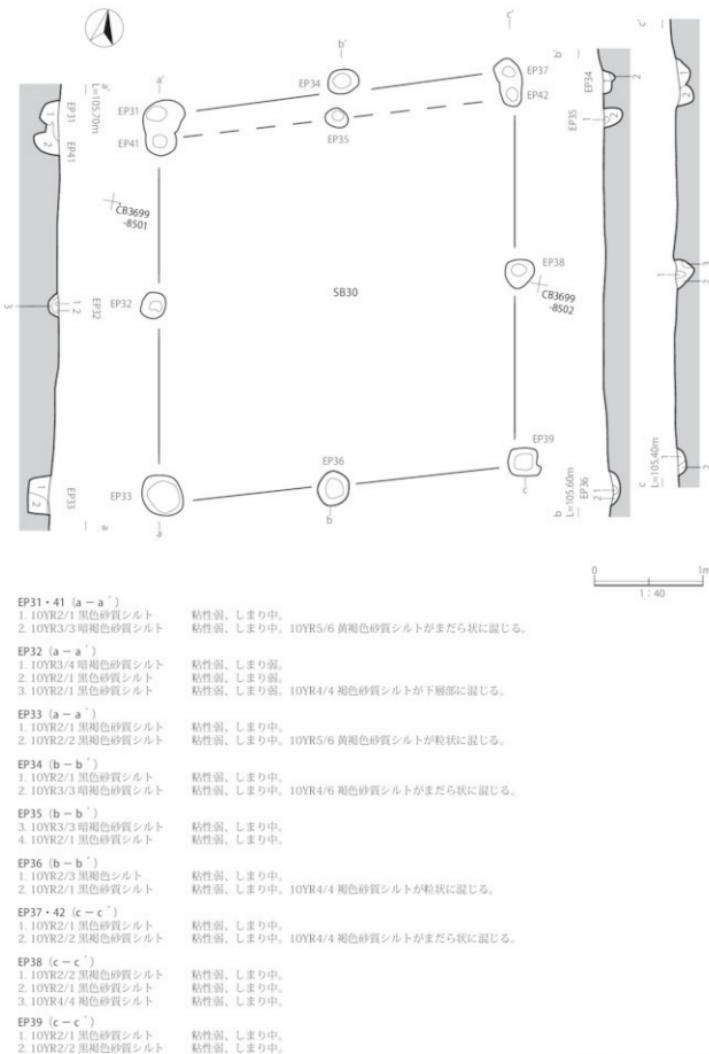


第7図 基本層序図



第8図 SB20 据立柱建物跡

III 調査の結果



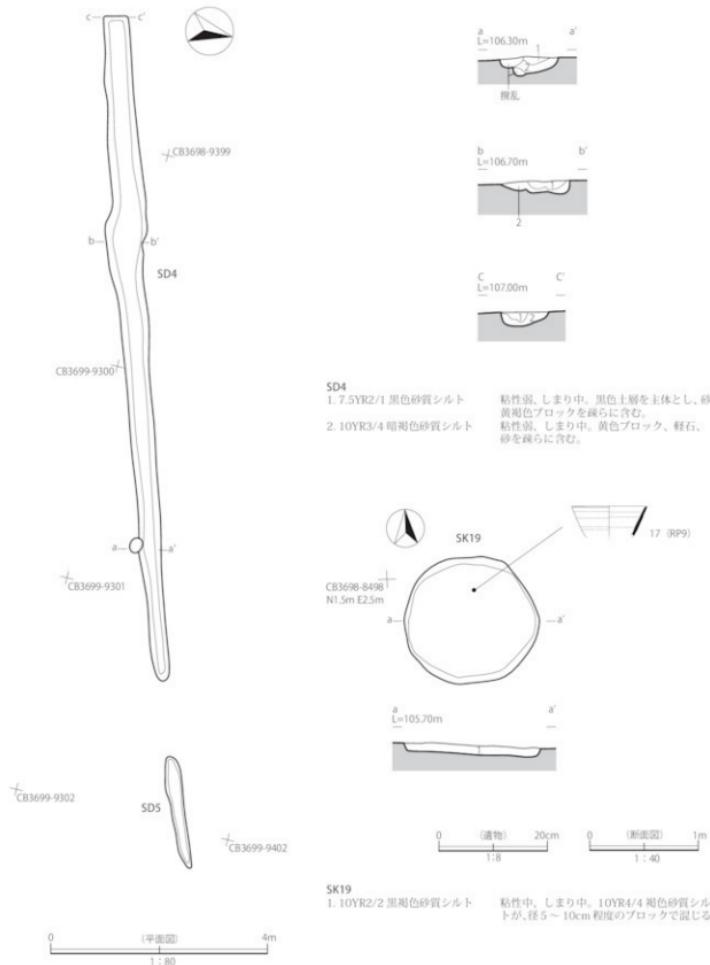
第9図 SB30 握立柱建物跡

表3 SB20・30 捩立柱建物跡観察表

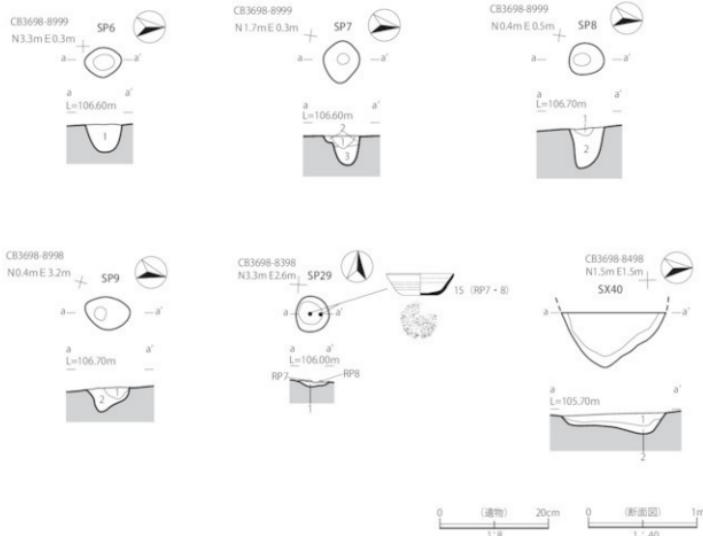
No.	遺構番号	柱穴 平面形	柱痕跡	計測値(cm' ()は残存値)			重複関係
				長径	短径	深さ	
1	EP21	円形	×	24	20	19	
2	EP22	円形	×	28	20	20	
3	EP23	円形	×	25	24	16	
4	EP24	円形	×	27	24	15	
5	EP25	円形	×	23	21	29	
6	EP26	円形	×	24	23	13	
7	EP27	円形	×	28	21	24	
8	EP28	円形	×	29	26	20	

No.	遺構番号	柱穴 平面形	柱痕跡	計測値(cm' ()は残存値)			重複関係
				長径	短径	深さ	
1	EP31	梢円形	×	40	(35)	18	> EP41
2	EP41	円形	×	30	(12)	24	< EP31
3	EP32	円形	×	24	24	9	
4	EP33	円形	×	42	36	20	
5	EP34	円形	×	30	24	11	
6	EP35	円形	×	21	18	16	
7	EP36	円形	×	32	29	7	
8	EP37	梢円形	×	(28)	25	11	> EP42
9	EP42	楕丸形	×	(18)	18	12	< EP37
10	EP38	円形	×	28	26	16	
11	EP39	楕丸形	×	26	24	8	

III 調査の成果



第10図 SD4・5溝跡、SK19土坑

**SP6**

1. 7.5YR1.7/1 黒色砂質シルト

粘性弱、しまり中。黒色土が主体。黄褐色ブロックと砂を縫らに含む。植物の根が混じる。

SP71. 7.5YR1.7/1 黒色砂質シルト
2. 10YR2/3 暗褐色砂質シルト
3. 10YR2/2 黑褐色シルト

粘性弱、しまり中。砂、黄褐色シルトが縫らに混じる。植物の根が混じる。

粘性弱、しまり中。黒色土上の漸化層。砂が縫らに混じる。

粘性弱、しまり強。黄褐色シルトブロック、砂が縫らに混じる。

SP81. 7.5YR1.7/1 黒色砂質シルト
2. 10YR2/1 暗褐色砂質シルト

粘性弱、しまり弱。砂が縫らに混じる。

粘性弱、しまり中。砂、黄褐色ブロックが縫らに混じる。

SP91. 7.5YR1.7/1 黒色砂質シルト
2. 10YR2/2 暗褐色砂質シルト

粘性弱、しまり弱。砂が縫らに混じる。

粘性弱、しまり強。砂、黄褐色シルトブロックが縫らに混じる。

SP29

1. 10YR2/2 黑褐色砂質シルト

粘性中、しまり中。

SX401. 10YR2/2 暗褐色砂質シルト
2. 10YR4/4 暗褐色砂質シルト

粘性弱、しまり中。極小粒の 10YR4/4 暗褐色砂質シルトが混じる。

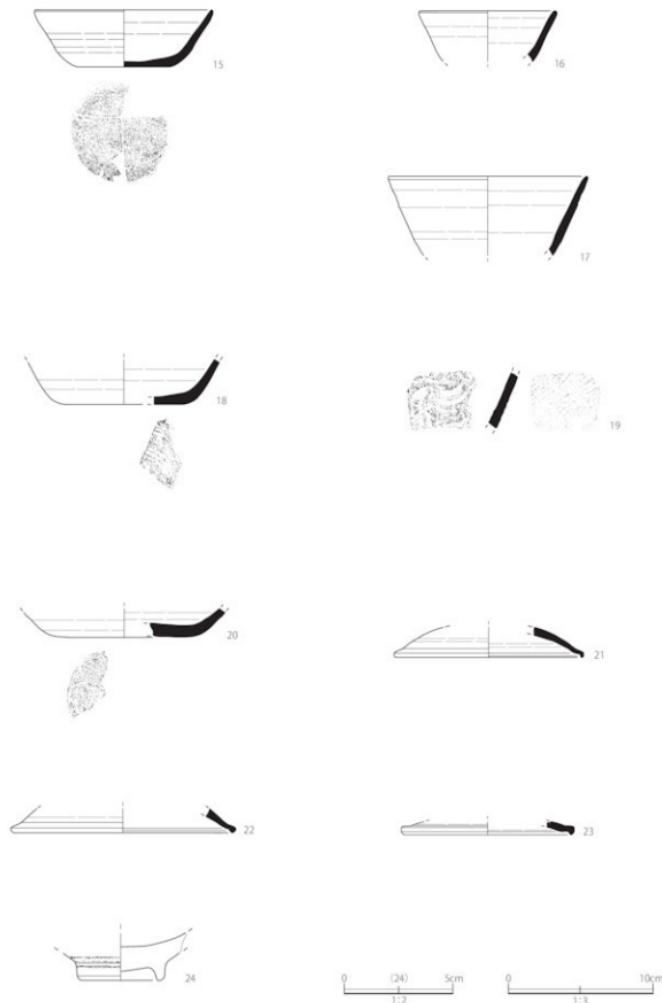
粘性弱、しまり中。

第 11 図 SP6・7・8・9・29 柱穴、SX40 性格不明透構

III 調査の成果



第12図 遺物実測図(1)



第13図 遺物実測図(2)

III 調査の結果

表4 織文土器観察表

図版	遺物	写真	種別	器種	地区	出土地点	計測値 (mm)			縄文 溶体	調整 外面	内面	胎土	焼成	型式・時期	備考・RP
							口徑	器高	底径							
12	1	11	深鉢	2区	9トレチ		5.5		LR		ナデ		砂粒混入	良好	明期	粗製土器

表5 土器師・須恵器観察表

図版	遺物	写真	種別	地区	出土地点	計測値 (mm)			縄文 溶体	調整 底部	胎土・焼成	色調	備考		
						口径	器高	底径							
2	11	土師器甕	表土				5.5	ナデ	ナデ		細砂混入・やや良	7.5YR6/4に5y、黄褐			
3	11	土師器甕	表土				8.0	ナデ	ハケメ		粗砂混入・やや良	7.5YR7/6相			
4	11	土師器甕	2区	西壁			6.0	タタキ	ナデ		緻密・良好	5YR7/8相			
5	11	土師器甕	1区	CB3699 9402			5.3	ハケメ	ハケメ		細砂混入・やや良	10YR8/4浅黄褐			
6	11	土師器甕	1区	CB3699 9600			7.5	ナデ	ハケメ		粗砂・石英	10YR7/6明黄褐			
7	11	土師器甕	2区	SX18			8.5	タタキ	アテ		粗砂・石英混入	5YR7/8相			
12	8	11	土師器甕	2区	SK19		6.2	ケズリ	ハケメ		粗砂・石英	7.5YR8/6浅黄褐			
9	11	土師器甕	2区	SP24			4.5	ロクロ	ロクロ		粗砂・石英混入	10YR8/4浅黄褐			
10	11	土師器甕	2区	SP29			4.9	ナデ	ナデ		細砂混入・やや良	5YR7/6相			
11	11	土師器甕	2区	9トレチ			8.0	ナデ	ハケメ		細砂混入・良好	5YR7/8相			
12	12	土師器甕	2区	9トレチ			4.7	ハケメ	ハケメ		細砂混入・良好	7.5YR7/6相			
13	12	土師器甕	2区	9トレチ			4.3	ケズリ	ハケメ		細砂混入・やや良	7.5YR6/6相			
14	12	須恵器甕	1区	CB3699 9202			14.0	ハケメ	ナデ	嗣代	緻密・良好	10YR7/3に5y、黄褐			
15	12	須恵器甕	2区	SP29	124	40	66	4.5	ロクロ	ロクロ	回転 系切	緻密・やや不良	2.5Y8/1灰白	RP7・8	
16	12	須恵器甕	1区	トレチ 埋土	(96)		4.0	ロクロ	ロクロ		緻密	良好	2.5Y6/2灰黃		
17	12	須恵器甕	2区	SK19	(139)		5.3	ロクロ	ロクロ		細砂・石英混入	5Y8/1灰白	RP9		
18	13	須恵器甕	表土		(82)	6.3	ロクロ	ロクロ		回転 系切	緻密・石英混入 良好	2.5Y5/2暗灰黃			
19	13	須恵器甕	表土			6.0	タタキ	アテ			緻密	良好	2.5Y6/1黃灰		
20	13	須恵器甕	XO		(76)	6.0	ロクロ	ロクロ		回転 系切	緻密	良好	2.5Y4/1黃灰		
21	13	須恵器甕	XO	(130)		5.0	ロクロ	ロクロ			緻密	良好	7.5Y6/1灰		
22	13	須恵器甕	XO	(152)		5.0	ロクロ	ロクロ			緻密	良好	10Y5/1灰		
23	13	須恵器甕	XO	(140)		5.0	ロクロ	ロクロ			緻密	良好	10Y5/1灰		
														外面に一部自然釉付着。 墨み	

表6 磁器観察表

図版	遺物	写真	種別	生産地	地区	出土地点	計測値 (mm)			縄文 溶体	調整 外面	内面	胎土・焼成	文様・釉薬	登録番号・年代・備考
							口径	器高	底径						
13	24	13	磁器碗	肥前	1区	CB3698 9898		36	8.5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	(外面) 圖線・透明釉	18C	

IV 総 括

今回の調査では、平安時代を中心とする遺構を確認した。遺構は、掘立柱建物跡・溝跡・土坑・柱穴・ピット、性格不明遺構である。合計で 31 基検出した。

A 遺 構

掘立柱建物跡は、2 棟 (SB20・30) 検出した。いずれも柱穴 8 基で構成され、構造は 2 間 × 2 間、規模は SB20 は 3.44m × 3.42m、SB30 は 3.38m × 3.6m である。柱穴は直徑約 20 ~ 40 cm の円形を主体とし、深さは約 10 ~ 30 cm と差がある。建物の規模は、両棟共に 2 間 × 2 間と小型の掘立柱建物跡であるため、性格としては倉庫の可能性が考えられる。また EP24 (SB20) からは土師器片が出土していることから平安時代と考えられる。

SK19、SP29 からそれぞれ須恵器片が出土し、これらは本遺跡において数少ない遺物出土遺構である。SK19 は、第三章にて先述した通り、覆土から出土した須恵器环 (17) の器形から、9 世紀前半と考えられる。

SP29 は、須恵器环 (15) が 5cm 程度の浅い覆土の最上層から出土している。遺構直上でかつ覆土が浅いことから、撲乱などで動かされて出土した可能性も考えられる。遺物は 9 世紀前半と考えられることから、SP29 は、平安時代 (9 世紀代) とみなしたい。

B 遺 物

遺物は、縄文土器・土師器・赤焼土器・須恵器・磁器が出土している。その多くが破片であり、遺物の全容を把握できる資料は少量であった。

須恵器甕 (14) は、外側に土師器に用いられるハケメを施した調整が認められる。

14 と同事例は、県内全域でも少数であるが、確認されている。例として上高田遺跡 (飽海郡佐佐町)、平野山古窯跡群 (寒河江市)、蛇崩窯跡 (長井市) などが挙げられる (山形県埋文化 1998a・1998b・2006)。現在の村山市において古代 (奈良・平安時代) の遺跡の発掘事例が少なく、このような出土例は、村山市内では確認されていないが、今後村山市内における発掘調査で同事例が確認される可能性があると思われる。

C ま と め

遺構・遺物の分布状況を見ると、遺構に関しては調査区北側 (1 区～2 区北側の範囲) から検出されており、南側からはほとんど検出していない。また、西側丘陵に沿うかたちで検出している。遺物は、先述したように大半が遺構外出土であり、遺構内出土は少ない。しかし、その少ない資料から出土位置を確認すると、遺構の分布域と同様に西側丘陵側にかけて出土位置が点在している。

今回調査した範囲では、堅穴住居跡などは確認されなかった。調査区の西側で遺構を検出していることから、調査区西側に遺構の分布域は広がるものと考えられる。今回調査した範囲は、遺跡範囲内で最も低地であり、降雨により冠水する。水はけの悪い場所であった。また、北東隣に位置する清水遺跡 (第 1 地区) の南端部、本遺跡 (2 区南東隅) に接する場所から排水や灌漑のためと思われる大きな溝跡が数条確認されている。そのため、この土地の低地には水が溜まりやすいこともあり、堅穴住居跡などが検出されていない要因と考えられる。これらの事から、当地区は居住区域とは考えにくい。西側に主体となる遺構の分布域が広がるものと考えられる。

引用・参考文献

- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1998a 「平野山古窯跡群第 12 地点遺跡第 2 次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 52 集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1998b 「上高田遺跡第 2・3 次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 57 集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006 「蛇崩窯跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 155 集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2011 「年報 平成 22 年度」

写真図版



調査前近景（北から）



9 トレンチ全景（西から）



9 トレンチ基本層序 a-a' (北から)



1 トレンチ基本層序 a-a' (東から)



1 区基本層序 B (西から)



1 区基本層序 C (西から)



1 区遺構検出状況 (南東から)



SB20 掘立柱建物跡検出状況（南から）



SB20 掘立柱建物跡完掘状況（南から）



SB20EP21 柱穴完掘状況 (東から)



SB20EP22 柱穴完掘状況 (東から)



SB20EP23 柱穴断面 (東から)



SB20EP23 柱穴完掘状況 (東から)



SB20EP24 柱穴断面 (南から)



SB20EP26 柱穴断面 (東から)



SB20EP28 柱穴断面 (東から)



SB20EP28 柱穴完掘状況 (東から)



SB30 掘立柱建物跡検出状況（南から）



SB30 掘立柱建物跡完掘状況（南から）



SB30EP32 柱穴断面 (東から)



SB30EP32 柱穴完掘状況 (東から)



SB30EP33 柱穴断面 (東から)



SB30EP33 柱穴完掘状況 (東から)



SB30EP34・35 柱穴断面 (東から)



SB30EP34・35 柱穴完掘状況 (東から)



SB30EP37・42 断面 (東から)



SB30EP37・42 完掘状況 (東から)



SB30EP38 柱穴断面（東から）



SB30EP38 柱穴完掘状況（東から）



SB30EP39 柱穴断面（東から）



SB30EP39 柱穴完掘状況（南から）



SB20・30 完掘状況（東から）



SB20・30 完掘状況（南から）



SD4 溝跡断面 a-a' (東から)



SD4 溝跡断面 b-b' (東から)



SD4 溝跡完掘状況 (東から)



SK19 土坑断面 (南から)



SK19 土坑完掘状況 (東から)



SK19RP9 出土状況 (北西から)



SX40 性格不明遺構断面 (東から)



SP6 柱穴・ピット断面 (東から)



SP6 柱穴・ピット完掘状況 (東から)



SP7 柱穴・ピット断面 (東から)



SP7 柱穴・ピット完掘状況 (東から)



SP8 柱穴・ピット断面 (東から)



SP8 柱穴・ピット完掘状況 (東から)



SP9 柱穴・ピット断面 (東から)



SP9 柱穴・ピット完掘状況 (南東から)



SP29RP7・8 出土状況 (南東から)



出土遺物 (1)



12



13



14



16



15



17

出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

報告書抄録

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第219集

経塚森遺跡発掘調査報告書

2015年3月31日発行

発行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3264 山形県上山市中山字壁屋敷5608番地
電話 023-672-5301
印刷 田宮印刷株式会社
〒990-2551 山形県山形市立谷川3丁目1410-1
電話 023-686-6111

